みやぎ教育文化研究センター

センターつうしん

NO.66

ひと言

「石巻災害医療の全記録」を読む

斎藤　重美（センター運営委員）

著者は、石巻圏合同救護チームを統括した石巻赤十字病院の石井正医師です。震災によって破壊された地域医療の状況や、のべ3633の救護チーム、約1万5千人のスタッフが石巻圏で奮闘した災害医療がどれほど過酷だったかを知ることができます。

その中で石井氏は、七か月間の仕事を振り返って「あらためて感じたことは、やはり人は、仕事をして、お金を稼ぎ、それによって生活することで初めて人としての誇りが生まれるということだった。津波は人々の命や財産だけでなく、その誇りさえも奪った」と述べ、その誇りを取り戻すために「政府や自治体には、なんとしても雇用を生み出してほしい」と結んでいます。震災復興の在り方について本質を突いていると思いました。

全編を通して印象に残るのは、石井氏並びに石巻圏合同救護チームの「救える命は全力で救う」という強い意志、決まりごとに縛られない柔軟な対応、行政・民間企業を含めて協働を作り上げたとりくみです。災害医療の分野と教育分野は違いますが、生かすことができる教訓だと思います。

震災後一年が経つとは言え、まだまだ「非常時」です。教育の再生にとって、何が必要で、何が障害なのかを考える一つの参考になる一冊ではないかと思います。（本書発行は講談社）

目次

ひと言　斎藤　重美　1

あの日から一年　被災地石巻の高校生は語る　2
平塚　光　千葉　克馬　山本　優莉
星　有沙　千葉　結莉

座談会を終えて　～話すこと、聴くこと　清岡　修　11

東京高校生平和ゼミナール
現地石巻高校生との交流　平居　高志　12

教室の報告
被災地からやってきたケンジ君　鈴木　吉雄　14

戦後教育実践書を読む会　第３回
「村の一年生」（土田茂範）にみる教師と子ども
渡部やす子　16

小森陽一先生に授業をしていただいて
高橋かおる　18

会員から
みやぎの皆様へ感謝を込めて　目黒　稚子　20
教育と政治は別の問題だ　安藤　正一　20

「会員のつどい」報告
研究センターに期待されるもの　須藤　道子　21

研究センターからのお知らせ　23

センターのうごき　24

題字：江島隆二　表紙写真：千葉建夫

あの日から一年

被災地石巻の高校生は語る

参加者　平塚　光さん（宮城水産高・情報科学科3年）
千葉　克馬さん（宮城水産高・情報科学科3年）
山本　優莉さん（石巻女子商高・商業科3年）
星　有沙さん（石巻北高・農業科3年）
千葉　結莉さん（石巻北高・農業科3年）

3・11からちょうど11ヶ月目にあたる2月11日、石巻・平和会館に高校生5人に、「あの日から」を語り合ってもらいました。

この会は、卒業式や就職・進学とたいへん忙しい時期を承知でぜひもちたいと考え、鈴木隆さん（石巻北・平居高志さん（宮城水産）・平居淑子さん（石巻女子商）の3人の先生に生徒集めをお願いし、容易に探せない会場については復旧の仕事に身を粉にしている菊池英行さん（元高教組委員長）にお願い、みなさんのご協力によって実現できました。

当日は、3人の先生が会場まで生徒を案内してくださり、鈴木さんと平居高さんには終了するまで待っていただき、離れている北高生2人は鈴木さんが車で送ってくださいました。

センターからは春日と清岡とが参加し、会の進行には春日があたりました。話し合いは1時間半ほどでしたが、5人ともに率直にその時々の自分を出してくれ、私にとっては非常に気持ちの良い会であったし、大きな希望を感じて会場をあとにしました。

それなのに、通信掲載にあたっては、紙数の関係でそのままお伝えすることができず、残念ながら相当縮めての報告にならざるを得ませんでした。真剣に話してくれた5人の高校生に、また、お読みいただくみなさんにも申しわけなく思います。

（かすが）

3・11、そのとき私は……

――大きく二つのことを皆さんに伺いたいと思っています。一つは、3・11当時のこと、もう一つは3・11後の皆さんのこれまでとこれからのこと。それらについてどんなことを考えているかもぜひ聞きたいです。まず、3・11の時の自分のことを教えていただきたいのですが。

山本：私は、震災の時は家庭学習日と言って、休みみたいな感じの日で家にいました。それで、地震が起きて、地震イコール津波っていう考えがあまりなくて、津波のこととか考えていなかったのですけど、南の方から沢山逃げてくる方がいて、その方たちに「もう津波そこまで来ているから早く逃げなさい。」って言われて、逃げようとしたら、家の前の側溝から白い水、津波がばあっと出てきて、これじゃあまずいなと思って、近くの山にかけて避難しました。それで、家は、基礎が1ｍくらい高かったので、その基礎ぎりぎりだったので床下浸水でした。家族は全員無事でその後もそのまま自宅で生活してました。

千葉克：あの日は学校で部活のラグビーをやってました。で、サンファンの方にみんなでランニング行ってたんですけど、地震来たんで戻るってことになって、学校に戻って避難して来た人たちの名簿作ったりなんかしていました。自分の家は、津波ギリギリ入んなかったんで、基礎も何も大丈夫だったんです。全員無事でした。

千葉結：私はその日学校での部活が終わり、ちょうど家に帰った瞬間でした。私の家は桃生で内陸部だったので、津波の被害とかは直接なかったんですけど、桃生地区は震災の揺れがすごくてそれで、うちんちは半壊って言ってたんですよね。母子家庭でその日母は雄勝にいて、5日間帰ってこなくて、父親の家は大街道の近くだったので、家ごと全部駄目で、お父さんの家族

も私の家も大丈夫だったのですけど、お父さんの方で暮らしていた兄が名取の閑上にいたので、お兄ちゃんだけは津波で亡くなっちゃったんです。

そのまま家には住めているんですけど、行政の人たちからは、もし次また大きい地震がきたとしたら多分家駄目だと思う、こっちでは津波での被害の人たちの仕事に追われてるから、全壊でないとお金も取れないのでと言われて、今そのまま住んでるんですけど次は分かんないです。

星：私は、部活してたんですけど、部活が午前中で終わって、お昼を学校で食べてから、車でお姉ちゃんが迎えに来て、帰ってる途中だったんですけ。天王橋って橋の上でその地震が来て、すごい揺れだったんですけど、それで、その後はみんなに連絡したんですけど電波が繋がりませんでした。家に帰ったら一部損壊の状態でした。その後、家で電気を起こしてテレビを見たらすごい状態で、「やばい。」と思いました。親戚の方が津波で家を流されてしまって、そこの家族、親せきとか知り合いが集団でうちに来て泊まって1ケ月くらい一緒に過ごしていました。

平塚：蛇田なので津波の被害はなかったんです。その当時は友達の家に5人で遊んでて、すごい揺れがあって、一回みんなうちに帰ろうということになったんですけど、うちに帰っても誰もいないということで、夕方頃まで友達5人といて外に出たらブロック塀がすごく崩れているところが多かったので、とりあえず人が埋もれていたりしないかということで、そのブロック塀を片づけて、誰もいないなということでみんなで安心したりとかして、夕方5時頃になってからみんなうちに帰り始めて、みんななんとかうちの人に見つけてもらったという感じなんですけど。で、自分の祖父母が牡鹿半島に住んでいるんです。自分は生まれも育ちも牡鹿半島なんで、その牡鹿半島の実家が流されてしまって。祖父母は一応無事なんですけど、帰る場所がなくなったなという意味ですごくつらい思いをしました。

3・11後それぞれの学校生活は

星：学校は被害はないけど避難所になり、最初はすごく多く1600人くらいはいたんだよね。

千葉結：私は避難した人たちのお世話っていうのはしてないんですけど、農業科なので収穫した野菜を売ったり、学校のある鹿又地区の伝統芸能で「虎舞」っていう踊りをその北高の避難所でやったり付近の避難所でやったりはしました。私たちはもう3年生でやる時間はとれないんですけど、でもやれるってなればもう一回やりたいです。

山本：女子商は校舎、すぐ近く海なんで、1階部分は壊滅状態で2階にも少し水が入って、最初そこを使おうかって話も出てたみたいなんですけど、また大きい津波が来ることを考えるとちょっと危ないってことで、3学年分散になって、1年生は女子高、2年生は市女、3年生は市立商業の方に半年くらいお世話になって、秋からは市女の方に仮設校舎が建ったので、今そこでみんな勉強しています。

今までは自分たちの学校じゃないところでお世話になっていたんでなんかやっぱり何ていうんだろう、女子商としての活動が一つもできなかったんです。その学校の行事に少し参加させていただいたりとかしてたんですけど、女子商としての行事が去年は一つもできなかったんです。私たちは3年生でしたけど、お世話になっている学校では1年生と同じような感じというか……。それでも私たちは一緒に体育祭とかに参加させてもらったりしました。

今年仮設校舎になってから3学年みんなで集まってやった行事っていうのが生徒総会。そういうのができたんで少し良かったなと思います。仮設に入って、3年生ということは自分で分かっていたんですけど実際1、2年生と一緒に学校生活を送ってみると、1年生と顔を合わせるのも学校の中では初めてだったんでなんか不思議な感覚っていうか、自分は3年生なんだなっていうのが仮設校舎に行ってから改めて実感として湧いてきました。

千葉克：間借りって、なんか肩身が狭いなって思います、やっぱり。本当はこうしてもいいじゃんって思うんですけど、でも結局借りてる身なんでできないんですよ。たとえば、もう正門から入らせていただければいいかなって思ったりすんですよね。「入んなって先生に言われてるんですよ。結局電車で来た場合、もう一個奥の方から入るんですけど。

千葉結：前から一時期うちらのサッカー部は宮水と合同チーム組んで顔見知りが結構いたから、宮水の人たちが来ることについては何も感じなかったよね。

星：農業科と水産のね、コースが一緒で、食品の人たちと何回か関わったりしたから。

千葉結：肩身が狭いようになんか見えないよね。

千葉克：ちょっとね。最初来た時には、多分自分だけだと思うんですけど、宮水って女子が少ないんですね。最初北高に来た時には共学って素晴らしいなって思いましたね。うらやましかった。

山本：分かります。私の方は女子だけなんで。石商に行った時はなんか新鮮っていうか、男いるんだみたいな、校舎に男がいるのがなんかすごい新鮮でした。

だから半年くらい石商とかでお世話になっていたんで、さみしい思いもあったんですけど、こっちに来れば来たで楽しいんで。思い出にはなります。活気がやはり違うんで。女子だけだと体育祭とかも盛り上がらないところがあるんですけど、やっぱり共学だと男子の人たちが「わああっ！」となってるからそれに乗っかって「わああっ！」ってなってるんでそれがすごく楽しくて良い思い出になりました。

平塚：今さっき肩身狭いって言ったばっかなんですけど、行事はやりたいようにやってたんで。体育祭は宮水に戻ってやったんで、それが良かった、生き生きしてた。

星：肩身狭いようになんて思わない、全然。結構オープンだよね。

平塚：実習できないのが一番ひどかったよね。機材持ってこれないですよ。水産にしても情報にしても。で、宮水に戻ったとしてもちょっとしかできないし、あと実習棟というか栽培で養殖してるところも津波で駄目になったので、やっぱり戻ったとしてもまずは掃除から……。

千葉克：とりあえず宮水にある軽い機材を持ってきて、実習室っていうのがあるんで、そういう所で実習してました。あと、1年生とか2年生はバスに乗って宮水の校舎に帰って実習したりしてました。

星：文化祭の時に、「宮水の人たちも講堂使いたいんだったら、ぜひ使っていいですよ。」って言ったら宮水の人たちに「いや、いいです。」って言われました。

平塚：自分も生徒会やってて、最初講堂使おうってなったんです。それで、生徒会の先生が北高の生徒会の先生に「講堂使いたいんですけど」っていうのを先生を通して言った。すると、うちの生徒会の先生が変なことを言って、それで結局まあ使わない方法でいいかみたいなことになって、文化祭はまあそれなりにめちゃくちゃ楽しんだんで、宮水の生徒たちが北高の文化際にお邪魔していったりとかしてたんで、自分は生徒会だったんでそういうふうなこと一切無くてうらやましい限

りだったんですけど。ま、あの日は結構楽しかったな。

——北高にとって、宮水が入ってきたことによっていいことあったらあげて。

千葉結：最初どんなのかなって思ったけど楽しめたし、意外と親しみやすかった。なんか明るくにぎやかになったよね。（北高の2人口々に楽しそうに話している。）

星：ちょっとうるさいなあって思う所もあったけど、でも楽しくやれて、実習とかもね。

千葉克：北高との接点とかないんで……。俺たちもな、ちょっとうらやましかったな。

平塚：うちの高校ってのは、なんか変な奴らばっかりで、ちょっとこんなこと言っていいか分かんないんですけど、夏とか北高さんがプール入るんですよ。それを見て、うちのクラスはそういうことなかったんですけど、他のクラスが見に行って喜んでたり。

千葉克：新鮮だったな。あんなにはしゃいでいるの初めて見た。

平塚：でも北高と一緒になって、今まで宮水で2年間過ごしてきたんですけど、今までにない盛り上がり方っていうか、プールのことじゃないですけど、なんだかんだ言ってみんな楽しいんだと思います。

千葉克：遠くなったからさ、結局自転車で来る奴も多くなったんですよ。で、今までしゃべってない奴としゃべるようになったりとか、北高っていうかあっちに行くことによって仲が深まったなっていうのが多かったですね。

平塚：北高と仲良くなる……。知らない人ともなんかしゃべったり、男子とも話したり、北高にも、結構友達がいるんで、そういう人たちとの関係で仲良くなったりとかしました。

——新しい場が作られればそれだけ今までなかったことが当然起きてくるわけだからね。そういう意味で、山本さん、もう少しその間借りの時のことで何かないですか。

山本：私も生徒会入ってて、生徒会として石商に対して何かやれることないかみたいなことを考えたときに、駐輪場にいっぱい葉っぱとかゴミとか有ったんで、生徒会としてそこ片付けようということになって、朝、学校に行ったらお掃除したりするとかはしていたし、あと石商とのあれは、今まで女子商生として2年間過ごしてきたんですけど、それの中になかったような楽しいことがいっぱいあって、石商の人たちともすごい仲良くなったし、楽しかったです。関わりとかも、廊下ですれ違った時にちょっと話したりして、いろんな場が広がって楽しかったです。

——あなたたちのような若い人たちは不自由な暮らしでもすぐにぱっとつながれる強みがあるんじゃないかな。われわれ年寄りは簡単にいかない。

千葉結：サッカー部は最初一緒にやってたんです。河南のグランドで。一緒にやってて最初すごい面白かったんですよ。前も合同でやってたし、宮水の人たち1人ひとりすごいうまい。私たち、どうしてもだらけるところ多かったんで、きびきびできっかなって思ったら、どうしてかよく分かんないんですけど、途中から宮水の人たち一緒に練習しなくなって、いつの間にか、宮水のサッカー部の人たち、うちらのグランドで練習しなくなっちゃって、「あれ？」みたいな……。物貸したりとか、宮水の人たちのボール、一応サッカー部の部室貸してあげたりしてたんですけど、それは、さみしかったですね。何でか分からないけど。双方の顧問の先生たちでいろいろ話したみたいで、やっぱり大会とか近くなったときは、どうしても試合

は別々でやんなきゃないから、お互いの練習内容とか全く一緒だと問題あるんじゃないかなって話になったらしいんですけど。でも、それはさみしかったかな。

千葉克：ラグビー部は野球部のグランド間借りしてやってまして。で、ノックとかやられると、タックル練習してる時に向かっていくんですけど、結局、硬球に向かっていくのがおっかないんで、みんな逃げていくんです。ノック始めたら、グランドのちょっと脇のところにある駐車場の所に行って練習したりしてました。

千葉結：最初、ラグビー部の人たち、グラウンドでやってたよね。ラグビー、めっちゃ好きだったから。サッカーのマネジャーしてて、やべえ、ラグビー部だあって。ずっとみてたり……。

星：テニス部はうまくやってんじゃないのかなって思うんだけど。一緒にやってるね。合同みたいな感じ、それかお互いにこの時間には宮水で、この時間には北高でみたいにやってたり、……うまくやってたよね。見た感じなんかすごい上手にできてんじゃないかな。

平塚：自分はバレー部なんですけど、隣の鹿又小の体育館を借りてやってるんです。自分ら宮水がやる場所がなかったんで、なんとか北高さんの顧問の人とお話をしてなんとか使わせてもらって一緒に、小学校の体育館狭かったんですけど、その狭い中、北高さんのバレー部が一緒に部活やってくれてたんで、すごい、あの頃、バレーやって楽しいなって思いました。

3・11後、自分にどんな変化があったか

――一緒の生活の中で苦労は結構あるんでしょうね。いいところも見つけて行かないと、お互いにね。

二つ目に入ります。自分はこういうわけで今の高校に入ったとか。でも、3・11があり、そのことによって何か自分が考えていたものに変化があったかなどを聞きたいのです。

山本：私は未熟児で生まれて、ちっちゃくて病院の看護師さんなんかにすごく世話になったということもあって、ずっと看護師という職業は目指していたというか、心にはあったんです。でも高校に入る際にいろんな選択肢が出てきて市女の方もいいのかなとか、商業科に行って商業の勉強してもいいかなといろいろ考えたんですけど、やっぱり事務的なことを勉強していけば将来夢が変わったとしても、そういう資格とかを持っていればいろんな面でその資格が役立ってくるんじゃないかと思って女子商に入学して商業の勉強してたんです。でも、やっぱりこの震災があってからは、避難所とかに派遣の医療チームの方とか応援に来てくれて、自分の家族とかも沢山お世話になったのでそういう姿を見てやっぱり看護師という職業を目指したいなと思って、その震災がきっかけで看護師になろうというのを決定しました。

星：私は、家は農家なんですよ。それで、農業はそれほど嫌いじゃなくて、家の手伝いとかも結構していて、高校では、農業に最初興味が無くて、家でもやってるしと軽い気持ちで入っていったんです。そこから、農業の基礎とか学んでいって結構農業って楽しんだなっていう時もあったりしました。あと野菜販売とかで鹿又周辺のお客さんとかとコミュニケーションとかとっていて、自分は人と関わるのが苦手だったんですけど、そういうのを通して結構楽しいなと思って、将来はお客さんとかとコミュニケーション取れるような会社で働きたいなと思っています。

震災後に体育館に被災者の方たちがいたので、その体育館に入って、「野菜いりませんか？」って聞いたり関わりがあって、「売りに来てもらえるとすごく助かる。」みたいなこと言われて、そういう言葉を掛けられるとすごいうれしかったな

ということがありました。

平塚：自分は中3の時に、家が近いってこともあって最初北高の農業科に入ろうと考えました。父親が宮城水産出身なので宮水に入りたいとも思ったんです。中学校の時、先生に「お前はどういう職に就きたい？」って言われ、プログラマーみたいなものになりたいと言ったんですよ。「だったら宮水の推薦受けてみろ」って言われて、推薦でなんとか合格したんです。

それで3年間過ごして、3月11日の震災があって、震災になる前は自分は進学するつもりでいて勉強してたんですけど、3月11日の震災で父親が職も失って、祖父がカキの養殖やっていたんですけど、その職も無くなってしまって、そこで初めて自分はいろんな人に支えられて生きているんだなっていうことを、初めて感じたときだったんですね。で、自分は、進学したいなって思ってたんですけど、こういう現状になってしまったから就職しようって思ってたら、父親が「気にすること無いからお前進学しろ。」って言ってきたんですよ。それで、最初は進学しようって思ったんですけど、やっぱり、自分はいろいろな人に支えられて生きているんだなっていう気持ちが離れなくて、一日でも早く祖父や父親に恩返ししたいなっていう意味で就職を選ばしていただきました。震災で、やっぱり初めて自分は人に支えられて生きているんだなっていうのが感じることができたので、そういう意味ではいい経験できたなって気持ちがあります。

就職は決まって県外に出るんですけど、そこで寮に入って、そこから一日でも早く、ボーナス出たらでも旅行に連れて行ってあげたりしたいなっていう気持ちです。製鉄所なんですけど、製鉄の機械の保安、保守したり、4月にどういう部署に配属されるか分かんないんですけど、とりあえずまあ鉄を作るって仕事です。

千葉結：私が農業科に入った理由は、中学校の時遊んでばっかでまったく勉強してなくって、入りたい高校は何校かあったんですけど、いつの間にか入れる高校なくなってて、「あんたはちょっとどこにも行かれないんじゃないかなあ」と先生に言われて。私んちも農家で、「河南の農業科だったら頑張ればぎりぎり行けるかも。」って言われて、「よし、じゃあそこしかないならそこに行こう。」みたいな感じで勉強して一般で合格しました。

夢はいっぱいあって、どれになりたいかっていうより全部やるにはどうしようかなってずっと考えていて、一つ一つ夢を実現していくにはどうしようかなあって思ってて、いろんなことに挑戦しました。震災の時私は家にいたんですけど、母が雄勝にいて、5日帰ってこなかった時に、こっちも水道止まってたんで、いっつも給水車来るときに並んで水とか貰ってくるときに、「うちんちの人ようやく帰ってきたんだ。」とかそういう話聞くのがすごく辛くて。その人にとっては幸せだけど、私、母親帰ってこないし。地元の市役所に行ったら、うちの母が雄勝の市役所に逃げたっていうのだけは、同じ職場の人で雄勝に行ってなかった人に連絡来てたんですけど。それで、もしかしたら桃生の市役所に何かしら情報入ってるんじゃないかと思って行ったら、「雄勝の市役所に逃げた人たち、屋上まで波来たから全員死んだんだってよ。」って言われ、自分は今何を聞いたんだかなあとか、これからどうしようかなあとかすごく思いました。母が帰ってきてくれてすごく嬉しくて、でも喜んでたら、兄とすごく仲良かった従弟が志津川で亡くなったって、同じ日に連絡あって。やっぱり自分がやりたいこと、そういう夢っていうより、私は津波を実際見たわけでもないし、家も半壊だけど残っているのに、なんで大切な人

が私の知らない所で死んでしまったのかなあとか、そういうふうに思って、学校4月に始まるまではいろいろ自分なりの葛藤ありました。このまんま、学校残れっかも分かんなくて、母は障害者施設の指導員やってたんですけど、母の仕事場もどうなっか分かんなかったので、それで、自分がやりたいとかそうことじゃなくて、私が今、自分自身でできることは何なのかなって考えました。学校来れない時はなるべく自分が出来ることをやろうと思って、大街道とか志津川の方に行って、泥出しとか、自分持っている服とか殆ど救援物資として渡したんですよ。それで、学校始まって、にわかに入った学校だったけど、クラスのみんな無事だったからそれがすごい嬉しくって。学校行って、いろんな話聞いたとしても、自分のことをすごく不幸だと思っていたから、誰が死んで誰が生きてたって多分何も感じないと思っていたんですよ。そして、いざ学校行って、みんなと会えて、すごく安心して、嬉しかったんです。一人ひとりいろんな事情が生まれて、今までのように生活できなくなっていたけど、みんな助かってて、すごく嬉しくて、その時初めて、私、この高校の、この科の、このみんなに出会えて本当に幸せだったなって思って、そっからちょっと、ボランテイア団体の人たちと一緒に石巻市内で活動させてもらったりしたんです。私も県外に就職なんですけど、ちょっと悩んだんですよね。そこに行くか、もしくはここの組織にそのまま入って、自分が地元でできる一番のことを考えながらやっていこうかなって悩んだんですけど、やっぱり、一回県外に出ていろんなスキルとか身に付けて、それで、今度、地元にもし戻ってくる時が来たとしたら、私が復興の最前線に立って石巻を今以上に元気になるようにしたいなって思うようになりました。みんなのおかげだと思います。県外って京都です。この会社に入社して知識を学んだら、多分どこに行っても通用するんじゃないかなってすごい思ったので行かせて貰うことにしました。

千葉克：俺は、家が近いからってので宮水に入ったんですけど、1年生の時は、海洋総合科と情報科学科ってあるんですけど、俺は最初海洋総合科に入ろうと思ったんです。でも、授業で海泳ぐってのがあったんですよ。それ聞いて、「俺、泳げねえじゃん。」ってなったんですよ。「息継ぎできねえし。」って。それで情報科に入ったんですよ。でも結局、水産に入ったからには資格とんなきゃなあってことで勉強してまして、勉強したんですけどなかなか取れなかったんです。で、最初入った時に、進学なんかいいかなあって思って就職決めてたんですけど、2年の時にやりたい仕事見つけて、そいつ目指すために進学すっかと決めたんですけど、結局地震来て、父ちゃんも母ちゃんも仕事なくしちゃって、これは進学してる場合じゃないなって思って、親に「俺、進学しねえから。」って言ったんですけど、「おめえ、やりてえの見つけたんなら、奨学金でもなんでも使ってなりてえのなって金稼いで立派になってから、支援して貰った人たちにどんどん返してけ。」って言われたんですよ。そこまで言ってくれるし、支援してくれる人がいるなら、なりてえ仕事なって立派なものになってお世話になった人たちに返そうかなあって思ってました。群馬の短大行って、幼稚園教諭の免許と保育士資格取ってこようかなあと思ってます。結局、俺、3年間部活ばりしてて、勉強追いつかないなと思って推薦で決めちゃって。2年間、分かんないことがむちゃくちゃあると思うんですけど、ちゃんと基礎全部身に付けてきて、本当に戻ってこれたら地元に戻ってきて、子どもを見てあげたいなと思ってます。

卒業、今とこれからを考える

――それぞれみんなよく自分のことも他の人のことも考え

ているんだよね。やっぱり高校生ってすごいなあ。これは自分のことも周りのことも両方あれば両方聞きたいんだが。震災を通して、これからを考えて気になることとか心配なこととか、そういうのをちょっと聞きたいなあ。

千葉結：心配なことっていうより、怖いなあって思うのは、この震災を忘れかけていることが怖いですね。やっぱり目に見えるところは普段通りに戻って来てて、この辺で見たらもう普通に、地震なんか来たのかなって思うけど、一歩出てみると全く何にもないし、瓦礫の山だらけだし、今後これをどうやって処理するのかとも思うし、一番心配なことは、私は京都に行くんですけど、地震と併発して原発事故があって、今後この辺の地区も本当に住んでていいのかとか、そういう情報とか一切入って来ないし、家族を残して行くわけだから、やっぱり今後この原子力発電の、原子力エネルギーの利用法とか、国もちょっと頑張ってもらわないと不安でしょうがないですね。日本というちっちゃい島には作りすぎてるんじゃないかなとも思うし。原発なくそうと言っている議員さんもいるにせよ、まったく今後変わんないと、そういうのが不安ですね、未来のこと考えたら。

平塚：自分も、怖いっていうよりは、心配も怖いも一緒のような気もするんですけど、人の命の重さ、ですね。自分の学校で2人犠牲者が出てしまって、津波で。自分のバレー部の後輩と自分のクラスの人なんですけど。最初そういう噂が流れて来た時は、冗談だろうって思ったんですけど、実際、学校で先生に話を聞いてみるとそうだった。去年の7月にようやく遺体が見つかって残念な気持ちっていうか、一緒に卒業したかったなって気持ちがありますね。

山本：私の学校でも同じ学年で2人と後輩2人と卒業生1人が亡くなったんですけど、最初同じ学年の2人が亡くなったっていう噂を聞いた時には、中学校からずっと同じクラスだったんで全然信じられなかったんですけど。新聞とか見てみると、名前上がってたりして、その現実を受け止めるまでにすごい時間かかって、今でもまだ信じられない部分もあんですけど、その人たちの分まで自分、頑張っていかなきゃないと思うし。この町も、まだ復興してない所もいっぱいあるんですけど、だんだん元に戻って来ている部分もあるので、自分も頑張って立派な人間になって看護師として働いている時に、患者さんとかに元気与えられるような看護師になりたいって思ってます。

千葉結：うちに残している家族のことだと、うちの周りってお年寄りが多いんですよ。やっぱ近所付き合いっていうんですか、よく会うと話もしますし挨拶も交わすんですけど、そういう人たちを残して行くっていうか、私一人何できるかってわけでもないんですけど、残して行くのがちょっと心配です。また次大きいのが来たら、うちの部落は若い人もなかなかいないんで、どうやって避難させるかなあって思いますし、山の上に登らせるのもひどいなって思って、そこ心配なんですよ。父ちゃんも仕事で遠く行くのかなっていうところもあるんで、なかなか帰ってこられないんで、弟とばあちゃんと近所の人たち残して行くのが心配ですよ。

星：私も就職で県外に行くんですけど、その時家族とも離れるし友達ともみんな離れてしまうんですけど、もしまたあの地震が来てみんなの安否が確認できるんかなとすごく心配ですし、あの震災で生き残ったのになんか意味があるんで、ずっと頑張んなくちゃって思うけど、すごく心配で、どうなるのかなあって、不安だらけです。

——それは誰でもみんな持つかも。3・11って誰もが考えられない事実に、みんなぶつかったわけだね。そのまんま元に戻ればいいのではないと私は考えるの。この3・

11を通してただ元へ戻るのではなくて変わらなければならないものがいっぱいあるのではないかなあって気がするわけね。今みんながその辺についてどう考えますか。

千葉結：私は、地元の石巻好きなんで、元通りになるのならば戻ってほしいんですけど、建物とか、外観はいくらでも直す気になれば元に戻せっけど、一番は被災者の人たちの心はもう絶対元に戻らないし、被災して大切な人が亡くなった人たちとか大切なものを失った人たちは、どうしてもその傷は絶対に消えないから。ボランテイアした時に仮設住宅回って、一人おばさんと出会ったんですけど、4月に旦那さん、津波で亡くなって見つかったって言ってて、半年くらい経った今でも旦那さんの話した時にすごい涙流してて、私には想像できないような話とかも聞いて、でも、変えなきゃないとしたら、その人は、つらい気持ちは消えないけどこれからのこともすごいちゃんと考えれていたから、そういう人たちも多いから、そういう人たちの為になるように私はしていかないといけないと思うし、やっぱり形だけ仮設住宅建てて入れて終わりなんじゃなくて、やってもらいたいとしたら、一人一人の心のケアをもっと一生懸命になってほしいと思うし、できるのであれば、みんなが一つになるっていうより、みんなの気持ちをちゃんと考えた行動とかとれるようになりたいし、国とかほんとに作り変えないと、また同じくらい犠牲者出ると思うんですよ。またどこか東北じゃないにせよ地震があった時に。多分今回の地震があったからこう対策をしようってなってないと思うんですよね。地震があったらまた同じだけ死者が出るし、行方不明者出るし、この地震で私たちはすごい悲しい思いをしたから、他の人にはそういう思いしてほしくないから、それをもっと考えてほしいですね。今回被災しなかったから、考えられないところがあると思うんです。自分たちの利益を考えて私たちに支援しようとしているようにしか思えないから、そういう形とか立て直さないといずれ自分たちに来た時に、多分今以上の被害が出るのが一番怖いので。もっと一生懸命、身近な被災地の本当の声を聞いてほしいし、今原発止めてほしいっていうデモとかも、強制的に終了させようとしているけど、それじゃなくてなんで今そういうふうに一生懸命デモとか反対とかしてんのか考えてこれからの国つくりしてほしいですね。

山本：今までと同じように戻ってほしいっていうのが一番なんですけど、よくテレビとかを見ていると、口では言ってるんですけど、なんか実際何活動してんのかなって思うんです。なかなかこの震災に関してこうしてるっていうのがあんまり見えて来ないんですよ。一つのことになんか誰の言葉の発言が悪いとかっていうのしか語ってなくて。そういうのを見ていると被災者はそういうことってどうでもよくって、ちゃんと活動してほしいっていうのがやっぱり一番の思いだから、もうちょっとちゃんと本当に被災地の人の意見聞いてほしいしですね。

平塚：自分も石巻は、できるのであれば元に戻ってほしいですし、学校だって戻ってほしいっていうのもあるんですけど、やっぱり今、国の政治とか見てると全く震災関係のことはもう忘れているような感じにしか見えないんですよ。テレビとか見てても、たまに地震の特集とかやってるんですけど、それもなんか他人ごとにしか見えないっていう思いで、すごい腹が立つときもあるんですよ。そういう意味では、やっぱり自分たち被災者の声を聞いてほしいし、今後どうすればいいのかってことも、そういう意味でも被災者の声も聞いてほしいです。

千葉克：国っていうか国会やらなにやらでごたご

た言ってないで、まとまってこの国を立て直してほしいです。いっぱい余震起きてるじゃないですか。またどこで起きっか分かんないんで、そういうのにも備えてみんな一丸となってやってた方がいいと思う。あと直した方がいいっていうか、自分は学校で被災したんですよね。で、マニュアル通りに校庭に逃げたのは良いんですけど、その後「どうすっか、どうすっか。」って先生たちも迷ってたんですよね。その先のこともやっぱり考えてやってた方がいいと思うんです。その「どうすっか」の時間で助かった命も助からなかったりしますし。グラウンド出て点呼取って終わりじゃなくて、グラウンド出て点呼取って、次はどこへ逃げればいいのか、どうした方がいいのかつうのももっと考えて、何事も、先生たちもってわけじゃないんですけど、生徒、先生もそういうのを頭に入れて行動した方がいいと思いました。

星：石巻、まだまだ復興してない所も多いと思うんですけど、見た目、町中の方は普通で自分も結構直って来てるのかなあとか思ったんですけど。この前バスで野蒜海岸の方に行って、たまたま通ったんですけど何にも変わってなくて、政治家ってのは何してんだろうなあって、早く復興のために動いてくれないのかなあってすごい思って、動きが全然見えないような気がして不安になりました。復興するなら、そのまま直すのもいいんですけど、やっぱり活気付くような、プラスアルファで考えて動いてほしいなあって思いました。

――じゃあ、ここで、お2人の先生に感想を聞きましょう。

平居：思った以上にいろんろなしっかりした話が出ましたし、うちの2人なんかは宮水を代表する立派な生徒だなあと。高校生を通して希望が見えるようです。

鈴木：すごくよかったなあと。うちは震災後50日経った4月22日に始まりました。生徒たちはどういう顔をしてくるのかなあっ

座談会を終えて　～話すこと、聴くこと

写真を撮るのは苦手だ。被写体のいい表情を撮ろうとしても、なかなか撮れない。たいがい可もなく不可もなくといった感じだ。でも、この日はちがった。話す相手にまっすぐ向けられた真剣な表情が映し出されている。和らいだ素敵な表情が浮かんでいる。それは、私の腕がいいからではない。座談会がよかったからだ、きっと。どのあたりから座談会はそういう表情を生む世界を創り始めたのだろうか。デジカメで撮った写真をながめながら、そんなことを思った。

座談会を振り返ると、一つのことに気づく。当初は、司会の春日先生を起点に、春日先生とのやりとりで会は進行していったが、途中からそれが一変する。高校生たち自身がその場に投げ出される話に耳を傾け、その話を受けて自分は何を語ることができるのか、どう応じることができるのか、そういう高校生たち同士の関係が座談会を形づくるようになっていった。その変化が、彼らの素敵な表情を生み出していったに違いない。

座談会を終えて、会場の机を片づけていると高校生の一人が突然、「こういう話は親とはしたことありますけど、ほかの大人に聴いてもらう機会はなかったので。今日は、こういう機会をつくっていただいて本当によかったです。ありがとうございました。」と、挨拶された。不意打ちを食らった気がした。「ありがとう」とお礼を言うべきなのは私の方なのに。正直びっくりもし、気恥ずかしくもあった。と同時に、私たち大人は、あの3・11から子どもたちとどう向き合ってきたのか、大事なことは何なのかを問われているように感じた。まだまだ冷たい冬の陽ざしに照らされながら、颯爽と自転車で走っていく高校生の姿がまぶしく、頼もしかった。

（清岡　修）

て、教師の側としてすごく心配なところがあったんですが、電車が動かない中、学校に集まって一様に嬉しそうにしているんですよね。学校に来て友だちと話したらすごく心が晴れやかになって希望が湧いてきたって話していました。2時間話を聞いて、あの時のことを思い出し重い気持ちにもなったんですけど、ここに希望があるなあっていう気持ちになりました。

――ありがとうございました。みなさんの話を聞き、震災からの再生を考えるために、ぜひ通信に高校生の話を載せたいと思った時考えた以上のことを聞くことができて本当に良かったと思っています。感謝です。これで終わりにします。みなさん、ありがとう。

東京高校生平和ゼミナール
現地石巻高校生と交流

平居高志

2月11日～12日、東京の平和ゼミナールが、仙台・石巻に来た。東京の私立高校を中心とした、男子生徒12名、女子生徒8名、教員4名、合計24名の団体である。

11日は、仙台で、福島西高校の小林みゆき先生から、福島の高校や原発被害についての話を聞き、12日が実際に被災の現場を見る研修であった。

12日午前中は、高教組元委員長の菊池英行先生（石巻在住）の案内で、東松島から女川にかけての沿岸部一帯を見て歩いた。午後は、地元高校生と交流し、その話を聞きたいという希望に応えて、宮城県水産高等学校の生徒3名との交流会が実現した。

東京の生徒の中には、岩手県も含め、震災以降、ボランティアとして現地に入った生徒も多かったが、震災後11ヶ月が経ったにもかかわらず、予想以上に復旧が進んでいないと衝撃を受けたようである。特に、女川町清水地区に山積みされた膨大なガレキの山には圧倒されたようである。

〈東京の高校生の感想から〉

「今回の東松島、石巻、女川は、町ごと津波に呑まれたり、更地になり何もかも無くなっていたり、海じゃ表せない気持ちでした。テレビで見た風景と同じとは到底言えません。他の人が撮った映像の中と、実際自分の眼で見るのと、ここまで違うのだと思い、実際に見ないと分からないこと、分からない気持ちが、たくさんあるのだと思いました。

私は被災前の女川の海は見たことがありませんが、私が今回見た女川の海はとても綺麗でした。青くて澄んだ色をしていて、心が和んだくらいです。けれど、あの海が防波堤を越え、人を呑みこみ町も壊し、何もかもめちゃくちゃにしたと想像すると、とても〝怖い〟という思いでいっぱいでした。けどやっぱり、自然は自然です。正直、しょうがないのかな、と少し思ってしまいます。それに、地震や津波は自然の起こした災いです。けれど、原発は人間の手で造った物です。震災があり壊れたのはそうですが、これは「しょうがない」で済む問題だとは思えません。」

「石巻市では「大規模な映画のセットみたいだなぁ……」と被災地を目の前にして感じました。それは、五感で被災地を感じ、悲惨だと思いながらも、心の何処かでリアリティを感じ取れなかったからです。まさしく、言葉通り「現実離れ」した風景が広がっていました。町が全て流されて、町とは到底言えない一年前まで町だった場所。根本から抉られて横倒しになってしまっている建物。一年前までは考えられなかった光景です。

そんな光景の中、特に印象的だったのが、途中で寄った地震によって廃校になった小学校です。その小学校の玄関には、逃げた子どものであろうランドセルが置いてありました。それを見た瞬間、「このランドセルの子どもは大丈夫だったかな。もうこのランドセルは背負われることはないんだろうな」などといった複雑な思いに駆られ、自然と目頭が熱

くなりました。

私がどんなに想像しても、あの地震と津波の恐怖を体験した人の気持ちは理解できません。出来たとしても、何万分の一にも満たないでしょう。でも、想像することによって新たな視点が持てます。何が起こったか知ることが出来ます。そして、それをまだ知らない人に伝えることができます。

もうすぐあの大震災と最大の人災から一年。今、改めて未来という分岐点を選択する時が来ているのではないでしょうか。」

午後は、石巻市内で地元高校生との交流会を実施した。東京の高校生の強い希望に応えて来てくれたのは、水産高校の1年生3名である。自分たちの被災の状況、仮設校舎での学校生活、更には、質問に答えて、自分たちが震災で何を学び、得たのかというようなことを語ってくれた。実際に震災を体験した人の言葉だけが持つ重みを、東京の高校生は感じたようである。また、いささか硬い雰囲気の交流会ではあったが、宮城の高校生にとっても、遠く東京で自分たちの状況に関心を寄せ、何かをしたい、そこから学びたいと思っている高校生がいたことを目の当たりにしたことは、強い刺激になり、楽しかったようである。

〈東京の生徒の感想から〉

「今回行けて、驚いたことは現地の高校生が私達よりテンションが高くてずっと笑ったりしていたことです。じゃ笑っちゃいけないのかって言うんじゃなくて、震災から1年経とうとしているけどまだみんな心が、ずしんと重くなっているのかなって思っていたからです。同じ高校生が話す震災当時の話は今までで聞いた話の中で一番生で伝わってきた感じがしました。

「午後に行った水産高校の高校生三人との交流はとても充実したものでした。今まで福島の高校の先生、あるいは様々な活動をされている方のお話を聞く機会は多くありましたが、同じ高校生とは交流したことがなかったためうれしかったです。震災当時のお話は大変貴重なものでしたし、なによりこの「出逢い」がもっと多くのつながりを生むのではないかと思います。また最初は現在の生活も苦しく、つまらない毎日を過ごしているのかと思っていましたが、三人とも現在の生活に満足しており終始笑顔でいたのが印象に残っています。」

〈石巻の高校生の感想から〉

「東京の高校生の真面目な雰囲気に押されて、話したいことをうまく話すことが出来なかった。同じ高校生なのに、質問もしっかりしていて驚いた。H君に『態度が悪い』と言われたのにはびびったが、それでも、同じ高校生として、何となく分かり合えるということは感じたし、自分たちに関心を持ってくれているということがよく伝わってきて、楽しかった。自分たちにとって身近で当たり前のことが、彼らにとってはとても珍しく新鮮だということにも驚いた。今日は3人しか来れなかったが、東京の高校ともっと大規模な交流会でもやってみたくなった。この次は、もう少し対等に話ができる気がする。」

傍らで見ていて、震災云々はともかく、違う立場の人間同士が出会い、語り合えたことにこそ意味があったと思った。

（石巻・高校教師）

教室の報告

被災地から やってきたケンジ君

鈴木吉雄

1　2011年度のスタート

私の学校では、4月8日（金）のみが臨時休業となり、11日（月）から1学期が始まりました。7日には震度6強（県南は震度5強）の余震があり、校舎にも亀裂が無数に走り、不安を抱えたままのスタートとなりました。（後でわかったのですが、校舎は5㎝、体育館は6㎝傾き、プールはオーバーフローしなくなりました。）

授業中に地震が起きることも頻繁にありました。あの震災を経験している子どもたちは、それまでと違って揺れるたびに必死に机の下にもぐります。親戚を亡くしたマリちゃんやアスペルガーのタロウ君は顔色を変えてもぐるほどです。

こんな不安はあっても、深刻な被害を受けていない学校では、早めに始業式が始まりました。これはこれで良かったと思います。3月11日以来約1ヶ月の休みとなり、友達とも会えず勉強することから遠ざかっている子どもがほとんどで、早く日常を取り戻してあげたかったからです。何より友達と会えたことがうれしそうでした。一つ学年が上がって、新しい先生とスタートをきるということは、子どもたちにとっても私たちにとっても、とても意味のあることでした。

2　被災地から転校生が

5月1日付けでA市のB小学校からケンジ君が転校してきました。C市の雇用促進住宅が当たったとのことですが、仕事がなく無収入なので、お母さんの実家がある地区から通うとのことでした。

私は、被災児童は心に大きな傷を負って元気がなくなっているかもしれないと思っていましたが、初めて会ったケンジ君は、そうしたふさぎ込んだ様子は見られませんでした。人懐っこくはきはきと話せる子でした。「算数が大好き」というだけあって、その理解力はクラスでも1、2を争うほどでした。そんなこともあって、わりとスムーズにクラスに入り込んでいきました。

初めて会った時にお母さんに次のことを確認しました。それは、地震や津波のことを本人と話してもいいのかということです。お母さんの話によると、自宅は2階まで津波が来たそうで、今でもおじいちゃんとお父さんはB地区にいる。仲の良かった友達が流されて今でも行方不明になっている。なので、まだショックを抱えていると思うので、地震や津波のことは話さないでほしい。本人から話してきた時は聞いてあげてください、とのことでした。私は津波を経験していませんので、ケンジ君の気持ちにどのくらい寄り添えるのか心配になりましたが、そんな心配をよそに彼は元気に学校生活を送っていきました。

ただ、6月に入ると時折疲れたように休み時間に机に突っ伏す様子が見られたり、外遊びよりも中遊びを好むようになってきたりしました。そして、6月22日（水）にケンジ君が休みました。その理由が私にとっては、予想外のものでした。

実はこの日の早朝に地震がありました。それほど大きなものではなかったのですが、テレビ画面のテロップに「津波注意報」が出て日本地図に黄色いラインが表れたものを見て、ケンジ君は涙をボロボロ流し学校に来られる精神状態じゃなくなってしまったのでした。地震はそれまでにも度々ありましたが、津波注意報が出たのは、震災以来この日が初めてでした。ケンジ君と直接震災のことを話さず、主に普段の様子や休み時間の私との会話でその心中を推しはかろうとしていたのですが、切迫したものを見つけられず少し安心していたところでしたので、この出来事はケンジ君のショックの大きさを改めて思い知る結果になりました。

次の日からは、普通に登校してきま

したが、ケンジ君のみならず震災を経験した子たちは多かれ少なかれ心にショックを抱えながら、あることがきっかけでフラッシュバックのように心を乱してしまうことがあります。そしてその傷がいつ癒えるのかは、まだ分かりません。また、その癒え方も千差万別のはずです。私たちは、そうした子どもの変化に思いを寄せ、寄り添うことを大切にしなければならないと、その時以来、より痛切に思うようになりました。また、それしかできないとさえ思います。

「寄り添う」、口で言うのは簡単ですが、どう寄り添うのか。私たちの最も多く時間を費やしている仕事が授業です。ですから、具体的には授業で子どもたち同士をつなぐような実践を積み重ね、人と一緒に生活することの心地良さを味あわせていくことが重要になってくると思います。そして休み時間や日記などで子どもたちが自分の思いを語った時に一緒に話すような心の余裕を持って、教室に居続けたいと思います。このことは、震災前からやってきたことと基本的には同じです。改めて教師の仕事というのは、学習指導要領のようにその時の状況に左右されるものではなく、多くの日本の教師たちがそうであったようにヒトが人として成長するために全力を尽くし、そのために人と人とをつないで人間らしく生きる実践を積み重ねていくことが、重要だと思います。

3　そして2学期

ケンジ君は、夏休み中、学校のプールには来ていなかったようで、クラスメートと遊んだという話も聞いていませんでした。それでも学校で見たケンジ君はいつもと変わりがないように見えました。子どもたち一人一人に夏休みの思い出を発表してもらいましたが、ケンジ君は「B地区に帰って友達に会ってきて楽しかった。」と発表しました。しかし1ヶ月以上もある夏休みですから、ケンジ君にも少しずつ変化が起きていました。

ケンジ君は、学区内のお母さんの実家からではなく、C地区の雇用促進住宅から通うようになっていました。お母さんの仕事がやっと決まって、お母さんが収入を得始めたからでした。ただ、下校後はこれまで通り、学区内のお母さんの実家に帰って、仕事帰りに迎えに来るという生活に変わっていました。

9月に入って、おじいさんが亡くなったという話が入ってきました。

ここで改めて考えてみます。

震災前のケンジ君は、生まれ育ったB地区で友達と楽しく遊び、家族（父母、姉、祖父）と暮らしていました。それが、震災により親友が行方不明になり、引っ越しにより転校することになり、さらに雇用促進住宅に引っ越し、おじいさんが亡くなり、心が休まる間もなく時が流れているという状態です。

これで、これまでと変わりなく授業を受けたり遊んだりするというのは、それは無理なんじゃないでしょうか。ケンジ君は転校当初、明るい表情で友達の中に溶け込んでいきました。しかし、この時ケンジ君なりに頑張っていた（無理していた）んじゃないでしょうか。だから、その後疲れる表情を見せるようになり、学校を休みがちになっていったのです。これも無理のない反応だったんじゃないかと思います。

そして今（11月）、時折休むことはあってもケンジ君は学校に来ています。子どもは自分の状況を変えることはできません。そうした中で、今の状況を長い時間をかけて受け入れていくしかないのだと思います。その時に力になるのが授業であり、友達であると思います。

ケンジ君は「ごんぎつね」で、友達になりたいばかりにいたずらばかりするごんの気持ちに気づいて、本当は優しいんじゃないかと思い、たくさん発言しています。休み時間にはおとなしくなかなか自分から遊ぼうと言えない子に声をかけて、新たな友達グループを作っています。

そして、11月3日。地域で行われた剣道大会で見事2位になってメダルと賞状をもらったと嬉しそうに報告に来ました。（B地区でも剣道をやっていました。）

これからもケンジ君は、様々な心の変化を見せ時には心配な様相を見せることでしょう。しかし、それを問題行動ととらえては、ケンジ君をますます追い込むことになると思います。そうした行動を当然の反応の表れととらえ、それを受け入れ、日々の学校生活を友達とつながることに中心を据えたものにし、またそうした授業を大切にしていきたいと思っています。そのようなことは、ケンジ君のみならずすべての子どもたちに必要なことだと思っています。被災地から来た子どもだけが心に傷を負っているわけではないのですから。

（＊今回は触れませんでしたが、仙南地域では放射能に怯える親や子どももいて、様々な問題に向き合っていかなければなりません。）

（蔵王町・宮小学校）

●「戦後教育実践書を読む会」第3回

『村の一年生』（土田茂範）にみる教師と子ども

渡部　やす子

「村の一年生」が書かれたのは1955年。山形師範学校を卒業した25歳の教師、土田茂範氏（以下筆者と書く）が教職6年目で初めて1年生を担任したときの1年間にわたる実践記録である。そこには子どもとともに生きようとする教師と、自由な教室でのびのびと成長する子どもの姿がありのまま描かれている。

初めての一年生とのスタートは、筆者にとって決して順風満帆なものではなかった。入学式の前日までも、彼はあれこれと思い悩む。遊戯が下手、オルガンが弾けない、何よりも口下手……。「無着などみろ。オルガンなどひけなくとも、けっこう山元で歌を教えているではないか。」という先輩教師のことばや、同僚の助けを支えに当日を迎えるのだが、さっそく泣いて教室に入らない子がいる。教師の戸惑うすがたがユーモラスに伝わってくる。その子どもたちが、学年の終わりには自分たちで掃除したい、他の題材でも絵を描きたいと、教師に要求するまでに成長する過程が、月を追って八十余りの章で記されている。この著書を読むと、子ども、ことに一年生にとっては、生活そのものが学びであり、学びの連続が生活なのだということを改めて感じさせられる。

まずは、「学級経営」と題された「五月」の章について紹介したい。

経営の目標

1　読んだり、書いたりできない子どもをなくす。

（略）何をさておいても、学校は文字を読んだり書いたりすることを教えなくては意味をなさないのだから、これだけはやりたいと思う。

2　自分のからだ、他人のからだをだいじにする子どもにする。

（略）自分のいのちを大切にする子どもにしたい。それが、ひいては、他人のいのちを大切にする子どもになるのではないだろうか。毎日毎日、いろいろな場で教えてやりたい。

3　たのしく、アッハハと笑える子どもにしたい。

（略）いかに苦しい生活でも、笑って克服していく子どもにしたい。笑いをともにするより、悲しみをともにするほうが多いこの世の中では、他人のうれしさをうれしいと感じる子どもにしなくてはと思う。（略）

今の学校なら、学級経営案は学校目標に照らして項目別に、などと細かい指示を受けて形式的に処理する文書の一つである（本当の考えは、私的に書く）が、ここでは一字一句が筆者のことばであり、教師としての生き方である。この経営目標が認められる時代だったのだな、と思って読んでいくと、「だんだん事務的になってくるような気がしている近ごろ、はばひろい人間的な面を重んずるようにしてやりたい。」「ぎりぎり子どもにおしつけることのない教師となって子どもたちとぶつかりたい。自分自身に不忠実であって、子どもにだけおしつけることのないようにしたい。ほんとうに、子どもといっしょに生活する教師となりたい。」と書かれている。

時代が変わっても、「だんだん事務的になってくる」自分を戒め、「これだけはやりたい」という自分の教師としての根っこをつかみ、「自分自身」に忠実に生き、「子どもといっしょに生活する教師となりたい」という願いは今の教師と変わらないことに気がつく。

「四月」の「あほう先生」では、黒板に描いたリンゴを数えさせる。「五つ」と答える子どもたちに教師はわざと間違えてみせる。当たり前のことをただ当たり前と教えてしまうのはもったいないというわけだ。学びは感動を持ってこそ行わせたいという姿勢は、すべての教科に通じるものだと思う。

この章を読んで私が思い起こすのは、生活科が出現したころ現代美術社から出た「どうしてそうなの」の一節である。

「たろうは　がっこうへ　いく。でも　ぽちは　がっこうへ　いかない。」

これを私の学校でも副読本として採択して使ったが、自分たち人間だけが学校へ行くという当たり前のことを感動を持って認識させることが大事だったのだと今になって思う。感動の伴わないことばは、頭を素通りするだけなのだから。

「読み書きの力をつけたい」と願う筆者の文字指導も作文指導も、子どもの認知面の発達段階をとらえつつ、一人ひとりの子どもの感動に寄り添いながらなされていることに注目したい。

「六月」の「ひとつの主張」も印象深い。整列するときにいつも同じ順番に並ぶことに異を唱える子どもが出てきた。そこで順番を逆にしたところ、今度は真ん中ばかりになっている子が「おらだ、まん中ばっかりがえ。いつまえにすんな。」と言い出す。これを教師は「みんな平等にしてほしいということの表れのように感じ」てその主張を認め、以後子どもたちは、自分たちで決めた秩序で毎日並んだというのである。日常の些細と思われる子どものつぶやきに丁寧に対処する教師のすがたに、金子みすずの詩を思い出す。

つもった雪

上の雪／さむかろな。／つめたい月がさしていて。下の雪／重かろな。／何百人ものせていて。中の雪／さみしかろな。／空も地面もみえないで。

「上の雪」と「下の雪」だけでなく「中の雪」まで歌うところがみすずらしい。何気ない子どものことばにも耳を傾ける教師のやわらかな感性を感じる。

この感性に裏うちされた筆者の実践の基盤には、なんと言っても「からだ＝いのち」を大切にする人間を育てたいという思いがある。それは彼の行う人権や平和教育に不可分に結びついている。

「五月」の「かげんはどうか」「ウンコはしてきたか」の章では、「大便をする習慣」からも「いのちを大切にする人間をつくっていくことができるのではないか」という考えが語られ、それが、どの教科の授業でも「基本的人権の芽をつくっていかなければならない」へと続く。「とらとらいおん」（十一月）では、武力で解決することの愚かしさを描いた紙芝居をみた子どもたちが、破壊力に最大の興味を示すのを見て、観念的ではない「戦争を否定する人間に育てる方法」を考える。その機会は訪れた。「兵隊になって死んでもいい」とチャンバラごっこをしていた子どもたちが「まぐろのさしみがくいたいから、兵隊にならない」（十二月）と話す章は圧巻である。

「あとがき」では「鼻や耳は店屋で売るか」の問いに対して「売らね」「人だからだ」と答えるやりとりが書かれている。また、知的な傷害を持つ、なかなか絵を描かないマサヒロ君が、黒板になら落書きをすることに気がつき、ついにはクレヨンで絵を描く「マサヒロが図画をかいた」（三月）話も感動的である。

「どの子もかけがえのない命を持った人間である」ということばは、今では当たり前のことのように言われているが、言うことを聞かないと売り飛ばすぞ、といった荒々しいことばが、大人から子どもに無造作に投げかけられている土地柄であった。彼の姿勢や実践は、ともに研究を続けている山形県児童文化研究会の仲間とともに培われたものであったといえるだろう。

この本が読む者を引きつけ、楽しませ、感動を与えるのは、各章における多様なエピソードの面白さは無論だが、本物の学びがあるとき、教師と子どもは互いに高めあうという学びの持つ不思議な可能性を感じ取るからではないだろうか。

土田茂範氏の実践の底にある限りない子どものいのちへのいとおしみと「共有」の思想を強く思う。

（仙台・元小学校）

小森陽一先生に授業をしていただいて

高橋　かおる

文芸部の顧問をしている私は、研究センターを通して、小森先生に農林高校で授業をしていただくことをお願いしました。生徒に読書の楽しさ・魅力を小森先生の授業を通して感じてもらいたい、作品を読む「読み方」を先生に教えてもらいたいと思ったのです。

２０１２年2月10日金曜日、「読書の楽しみ～『吾輩は猫である』と出会おう」と題する50分授業を3つのクラスで、放課後には文芸部を相手に「『羅生門』を読む」と題して90分の授業を小森先生にしていただきました。

「吾輩は猫である」の授業は、作品の冒頭部分を取り上げて、すべての文の主語と述語を探す、読んで自分が「同意する」ところと「同意できない」ところを探す、というやり方で行いました。

どちらの授業も、最初に小森先生から「吾輩は猫である」の作品について解説があり、次に先生の朗読、それから教室にいるすべての生徒が課題に答えるスタイルでした。

私は、「主語述語を探す」授業を見ながら、これでは読書の楽しみどころか読書が面倒だと思われてしまうのではないかと、正直なところ、お願いしたことと違うように感じられてはらはらしていました。なにしろ、生徒はとんちんかんなことばかり言って主語を探し出せません。隠れ主語がわからないのです。これには、国語の教師である私はまいりました。ここまで解っていなかったのかと愕然としました。しかし、生徒たちは一生懸命です。

ところが、20人を過ぎたあたりから、述語から探すという方法で答えられるようになってきたのです。もちろん小森先生のアドバイスがあってのことですが……。気づいてきたのです。

一方、「同意する」「同意しない」という授業は、正解を求める授業ではありませんでした。自分が同意するのはなぜで、同意しないのはなぜか、そのことを説明する中で作品と自分が出会う授業だったのだと思います。参観しながら、この方法は、生徒がどこを指摘するのか予測がつかないわけですから、どこを指摘されても生徒の考えに沿っていくことができる、授業者の力量が問われる授業だと思いました。内容的には「主語述語を探す」授業より高度なレベルではないかとも思いました。しかし、小森先生の、あえて順番にあてず、教室の中の人間関係や生徒の授業への気持ちを瞬時に察知しながらランダムにあてていくという絶妙な采配で、生徒の緊張感は50分間途切れることがありませんでした。最後のまとめでは、「吾輩は猫である」の背景には当時の欧米諸国の黒人の差別問題があるかもしれないと話され、そこで鐘が鳴ったのが本当にもったいなく思いました。

生徒たちは、「人間の方で考えた人と猫になって考えた人がいて発表内容が異なっていた」「いろいろな考えを聞けておもしろかった」「本当に考えさせられる授業だった」と書いています。

その感想だけでも、「自分が考えながら主体的に読むことの楽しみ」を生徒に実感させてくださったのだと感動します。さらに

生徒たちは全体の感想を述べるにとどまらず、それぞれの生徒がそれぞれの心に残った小森先生の言葉について書き、もう一度授業を受けたいと書いていました。

小森先生の授業によって、生徒は確かに「吾輩は猫である」に出会えたと思います。多くの生徒が、「主語が解ると小説の内容がよくわかりおもしろい」「とても良い授業でした」と感想に書いているのです。主語を明らかにすることで物語世界をくっきりと捉えることができたとき、「吾輩は猫である」に出会え、同時に物語を読む楽しさに出会えたのです。生徒が最も敬遠する、文法的かつ一文一文潰していく地味な方法によって生徒は本を読む楽しさを体験したのです。

また、「同意する」「同意しない」の読み方では、本の世界に主体的にかかわっていくことで「吾輩は猫である」に近づいていきました。ひとりではなく教室の全員がそれぞれの方向から近づいていきましたので、多面的な「吾輩は猫である」の世界が浮かび上がり、立体的に読めたこともおもしろかったのだと思います。生徒は主体的な読みと多面的な読みが読書の楽しみを生み出すことを体験しました。

解説ではなく生徒に実践させることで「読書の楽しみ」を味わわせてくださった小森先生の授業に感謝いたします。

放課後は、文芸部の生徒と有志合わせて24人が『羅生門』を読む」の授業を受けました。

まず、二項対立の概念を、親が子どもに発する禁止の言葉から子どもは世界が二項対立によって作り出されていることを学ぶと説明するところから始まり、上と下、右と左といった二項対立の境界領域が人間の目線にあると気づかせました。そして、「羅生門」を読み、①二項対立的な関係を発見すること、②二項対立の境界領域を見つけること、③その境界設定の論理を明確にすることを課題にしました。

私は、これはいったいどういうことになるのだろうと終わりが予測できませんでした。なにより私自身よく理解できていませんでした。生徒もそうだったと思います。しかし、先生は頓着することなく進めていきました。

最初の生徒が、「羅生門の下」を選び、対立概念は「上」と言いました。境界領域は「羅生門」そのものであるとなりました。「朱雀大路にある以上」に対して「以下」と答えた生徒からは、朱雀大路の持つ意味を問うなど、小森先生は少しずつ「羅生門」の作品の中に生徒を連れて行ってくれました。芥川龍之介が意図して使っている「隹」の入っている漢字の説明から、空一面に散らばる烏のイメージに繋がっていき、見下ろしているのは烏なのだと説明されると、「羅生門」は暗く重く陰惨なイメージをただよわせている作品に変わったのです。

参加した生徒が、「言葉一つ、文章一つに二つも三つも意味があり、読めば読むほど深くなってつながっていきました」と感想を書いています。じっくり時間をかけて読む読書の方法を体験できたのだと思います。

私は、文芸部の生徒の作品を読み、ひとつ一つの言葉に丁寧に向き合い、その言葉から生徒と向き合っているつもりでした。しかし、小森先生の授業を見て、私のやっていることはまだまだ浅く、表面をさらっとなでているだけのものなのだと気づきました。

先生はこの授業の初めの方で「なぜを意識しないと言葉に対する敏感さを失ってしまう」と話されました。うすうすと感じてはいたのですが、私は、言葉に対し随分鈍感になっていたことに気づきました。

この授業で、読書の楽しみについて学んだ生徒は、生涯の宝物を手に入れることができたと思います。

（小牛田農林高校）

小森先生の授業を受けて

（2年　A子）

初めて小森先生の講義を受け、羅生門の面白さがもっと上がりました。

本題に入る前に、子どもが「禁止の言葉」を覚えることを聞いたとき、どれだけ親に注意されたのかと思いました。改めて言葉は素晴らしいと感じ、もっと文学について触れたくなりました。今回学んだ「二項対立」の話を聞いて、羅生門を論理的に内容を把握するのは難しいと思い、頭をできるだけ空にし、話に集中しました。しかし、二項対立の境界領域を探すことができませんでした。境界領域を探すことは、とても苦労するのだと周りの人の答えを聞いていました。授業でも羅生門を学びだいたい内容を把握していても、また違う意見をしたような気分になりました。自分は、「見上げる」と指摘しましたが、生憎時間がなくヤリトリができませんでした。「見上げる」の反対の「見下す」で、境界領域は「下人」だと考えます。理由は下人がどこを見ているのかです。説明が下手なので、今よりマシな文が書けるように努力したいです。6連の2行目の「見上げる」という二項対立の応えは、小森先生が最後のまとめに、この物語に出てくる「鴉」が下を〝見下している〟と話してくれました。モヤモヤしていたのがスッキリし、また講義を受けたくなりました。

（3年　T男）

紙に書かれた文字や言葉は難しいと感じました。言葉一つ、文章一つに、二つも三つも意味があり、読めば読むほど深くなってつながっていきました。私は文や本を読んだりすることが好きでないため、羅生門がこんなにつながっていて楽しく面白いものだとは思いませんでした。

これから社会に出ていくまでに、何冊の本を読むかはわかりませんが、今までなら、さらっと一回しか読まなかったところを何度も読むことはないと思いますが、じっくり時間をかけて読みたいと思います。

● 会員から

みやぎの皆様へ感謝を込めて

目黒　稚子

私が、仙台での学習会に初めて参加したのは、音楽教育の会に林光さんがいらっしゃった時でした。その約30年後の一昨年「ひとりひとりの憲法」で林光さんのお話をお聞きすることができました。震災後の5月、福島で開催予定でした中森孜郎先生の講習会を仙台で開かせて頂きました。そして大田先生の会。今まで、どんなにみやぎの皆様から元気を頂き、エネルギーを頂いてきたことかと思います。本当にありがとうございます。

福島は今、国内はもちろん、海外から「放射能に汚染された地」として知れ渡ってしまいました。福島をなんとか元気にしようとたくさんの方々が立ち上がっています。

私が所属している福島コダーイ合唱団も、芸術も文化も守ろう・花開かせようとがんばっています。震災から1年の2012年3月、ハンガリーの「バルトーク・ベーラ記念館」と「コダーイ・ゾルターン記念博物館」にて演奏会、ハンガリーを代表する全寮制・初等専門芸術教育機関「パトロナ・フンガリエ高等学校」におけるバルトーク・ベーラの生誕を祝う記念式典への招聘を受け、演奏と日本のわらべうたのワークショップを行います。感謝と真心を込めて歌い、東北の元気をお伝えし、「ノーモア　フクシマ」を発信してきたいと思います。

（福島県）

教育と政治は別の問題だ

安藤　正一

若いころ、卒業する子どもたちへの「はなむけ」の言葉は、いつも「求真愛正」と書き、真理を求め正義を愛する生きかたが大切だと呼びかけました。戦後、天皇が「神ではない、人間だ」と宣言し、みんなで真実を追求していました。

首相吉田茂は、東大総長南原繁を「曲学阿世の徒と断じ、政治が教育を支配する体制が形成されました。しかし、教育は政治とは別の問題で、独立すべきです。

今、大阪の市長を中心に「維新の会」の活動が大きく取り上げられていますが、新聞報道によると市の条例で「職務違反」3回で「罷免」することにしたという。「君が代」斉唱の問題でですか、国民の国家意識を高揚させたいのですか、どの人だって家族を愛し、故郷を懐かしみ、そのなかでしぜんに国を愛する心が育つのですよ。

何日か前の新聞に「日教組の教育研究集会」の記事が載っていました。先生はこつこつと子どもに向き合って仕事をしています。こんな先生がもっと増え、それぞれの学校で互いに力を出し合って学校をつくっていく。条例で縛るのではなく、励まし合って学び合う学校にする。これが私の今の希望です。

こんな宮城県の教育活動の中心になっている「研究センター」に心から期待しています。

（白石・元小学校校長）

「会員のつどい」報告

研究センターに期待されるもの

須藤道子

3月3日、これまでの総会に換わるものとして、はじめての「会員のつどい」をもった。

冒頭、中森代表委員より、3・11の大震災でいのちを奪われた3名の会員の方への哀悼の意が述べられたあと、一年の経過期間を経て、4月より正式に宮城県教育会館の公益部門としての活動に入ることについての報告と、この一年の取組みが紹介された。

設立以来18年間、運営的には設立母体の宮城県教職員組合協議会と会員の会費に支えられながら、市民立の研究センターとしての活動を保持してきたことの意義を改めて振り返りながら、中森代表の教育会館移行に至る経過説明を聞いた。今、新たなスタートの時を迎えたが、この18年間の営みを礎として、宮城の、いや宮城から、豊かな教育文化を育んでいくためにセンターはどんな場であったら良いのか、多くを考えさせられた「つどい」であった。

3時間余にわたる熱気に満ちた「つどい」の内容をこの紙幅で報告することは出来ないので、無謀ながら大きく切り取っての報告としたい。

堀尾先生のお話から

3・11を経験した今、日常性のありがたさをどう未来につなぐのか＝地域をどうするのかという中で、「地域に根ざす教育は」ということは、風化してしまってはきたが戦後民主主義教育の中で課題としてきたことにつながるものがある。戦後の初心と3・11後の初心を重ねることができる。

そうした意味で、この間の宮城の教師たちの取組みはセンター通信63号や、『3・11あの日、あの日からのこと』、発表された幾多のレポートの中に豊かに見ることができる。その教師たちをつなぎ、互いに確かめ合って前に進む、そこにセンターの仕事があるのではないか。

「村を捨てない学力」、「地域にねざす」ということをより大きな視点で捉え直したい。グローバリゼーションや新自由主義のしくみを問うことなく地域にねざすのではない。

また、子ども観の転換をどう図るか、子どもの権利条約の思想をいかに深めていくかが問われている。3・11を体験し、権利条約の中核をなす「子どもの最善の利益」とは何かをそれぞれの言葉で語れる原体験を宮城の教師たちは持ったのではないか。

国連子どもの権利委員会のクラップマン氏は子どもの権利の中心を「尊敬され、聴かれ、応答されること」としているが、これに、一人ひとりの充足をもたらすための福祉、幸福度、満足度といった意味合いの「ウェルビーイング」（「しっくりする日本語を探しているが」と）を加えたい。本当に満足するとはどういうことか、その日その日の満足だけではなく、成長している存在として、子どもたちの現在の中には未来も含まれている。人間が成長発達するとはどういうことかも含まれているのである。

意見交流から
―学校現場の今
センターに期待すること

現場の先生からは、「とにもかくにも忙しく、上からの「改革」や、意味のない細かな提出物に追われるなど、希

望が持てない中、モラルハザード状態がある」など、深刻な状況があれこれの実例とともに語られた。「だからこそ、若い先生達に教師としての喜びや学びを提起し、現場を励ます、そこにセンターの役割を」との期待が述べられた。

「宮城の子どもの実態、教員の状況など『教育白書』のようなものがほしい。『学力テスト』では見えないものがあるということを訴えていくためにも、説得力を持ちたい。データの積み重ねも必要」との要望は、この何年か事務局でも摸索しつつ来たことでもあり、いよいよ本気で始動しなくてはと思う。

県教委のいう「志教育」にどう対峙するか方向性を打ち出してほしい、教育施策に精通した人や行政で取り組んできたような人にもセンターにかかわってもらいたいとの提起も、大きな課題である。

詳しく紹介出来ないが、一連の中で堀尾先生の応答をつなぐと「なかなか勝てないが、君が代問題など教育裁判での反対意見や補足意見をみると教育の問題をよく理解している裁判官も出てきている。判決は合法かも知れないが正当性とは別ということだ。だから教育実践、父母とのつながりなどから教育の条理を深めていくことが私たちの戦い方。処分も職務命令も校長の裁量権の中には『……しない裁量権』もある。裁量権の中身をともに作っていく、そういうつもりで校長や教育委員会に向きあいたい。問われているのはいつも教育とは何かであり、子どもの最善の利益である。」と話されている。

堀尾先生の示されているところと、現在の先生達の抱える困難の打破にはかなりの距離があるのではないかという指摘もあって考えさせられた。しかし、先生達は悩みや思いを語りながら「本来はかくありたい」というものを示しておられたし、多忙が日常化し流されてしまっているのかもしれないと自戒しつつ、立ち返るべきと考える地点は、堀尾先生の語られたこととそう遠くないように私には聴き取れた。

では、今、日常に照らして何が出来るのか。まずは存分に語り合うことからはじめていくことなのだろう。広く、体験を伝え合い、分かち合うこと、センター通信を通して、あるいは様々な集まりで、そうした広場にセンターがなり得ることが求められているのだろう。

つどいを終えて
―ともに子どもを発見していく営みを

堀尾先生の言われた『子どもの最善の利益とは何か』についての原体験」というのは、いのちの瀬戸際でギリギリの体験をした中で、という以上の意味を持っているのだと思う。

教育とは日々、子どもと出会っていく営みなである。いつもその子その子に即していなければならないと同時に、昨日とは違うその子その子に出会っていく、発見していくということであり、大震災の危機の中で、そうした体験を得たということではないだろうか。それにしても、誰にでも子どもだった時はあるのに、子どもとはなんと未知なる存在なのだろう。それぞれが不断に一人ひとりの子どもの中に「子どもの発見」をしていく営みを、ともに励まし合っていきたい。OBの先生から「自分の仕事を持ち寄る場であってほしい」との期待が語られたが、実践を持ち寄るということもそうしたことにつながるのだろう。

「ウェルビーイング」を、「安寧」という概念で捉えてはどうかという発言が数見先生からあった。先の「満足度」や「幸福度」という表現と比べるとやや控えめな印象ながら、何かと不安の多い今だからか、ありのままを包容する感じがとてもフィットする。「最善の利益」とは何かを考える上でもこのあたりの議論も深められたらいい。

寄せられた期待や願いは重いが、新たなスタート点を得たことを力として一歩、一歩進んでいきたい。教育と子どもたちに思いを寄せる人々とともに。

（センター運営委員）

研究センターからのお知らせ

❶ 12年度4月1日から研究センターの規定は次のようになります。

財団法人宮城県教育会館 みやぎ教育文化研究センター 運営規程

財団法人宮城県教育会館は、当法人の「教育関係者の文化機関として教育の振興に資し、もって本県教育進展に寄与する」という目的を達成するための公益事業として、憲法、子どもの権利条約を基本理念とする「研究センター」を設置する。

第1条（名称）
この研究センターは、財団法人宮城県教育会館みやぎ教育文化研究センター（略称みやぎ教育文化研究センター）と称する。

第2条（事業内容）
当法人定款第4条（1）（6）にもとづき、次の事業を行う。

1　教育・子育てに関する諸問題についての調査・研究
2　教育実践の交流とその理論化
3　教育研究・教育実践・子ども文化などに関する出版物、視聴覚資料などの収集・整理と運用
4　教育・文化に関する講演会・講座・研究会・読書会などの開催
5　「研究センター通信」、ブックレットなどの刊行ならびに広報活動
6　県内外の教育研究・文化諸団体などとの交流と連携
7　研究センターへの意見や要望等を交流する「交流のつどい」の開催
8　その他設置目的を達成するために必要な活動

第3条（運営）
1　前条の事業の推進のため運営委員会を設置し、具体的事業計画を策定するとともに、理事会に対して事業報告をする。
2　運営委員会は、当法人理事、学識経験者、教育関係者、市民をもって構成し、原則として年1回開催する。
3　運営委員は、運営委員会の推薦にもとづき、理事会が承認して委嘱する。任期は2年として、再任を妨げない。
4　研究センターの事業を統括する運営委員長を置く。
5　運営委員長は、運営委員の互選による推薦にもとづき、理事会が承認して委嘱する。
6　日常的な業務を統括する所長を置く。
7　所長は、運営委員会の推薦にもとづき、理事会が承認して委嘱する。
8　必要に応じて顧問を置き、顧問は事業運営に関する諮問に応じる。

第4条（その他）
この規定に定めるもののほか、運営に必要な事項は細則として運営委員会において別途定める。

第5条（規定の改廃）
この規定の改廃は、運営委員会の議を経て、理事会において決定する。

附則
この規定は、2012年4月1日より施行する。

❷ 新規定の施行によって次の点が変わります。

・これまでは会費を納入してくださる方が会員でした。新年度から「公益事業」になることによって会費納入の必要はなくなりました。規定に「会員」「会費」が明記されていないのはそのためです。

今後、運営上必要な細則をつくりますが、とりあえず、「これまで同様、センターつうしんの読者として今後もセンターのさまざまな取り組みを支えてくださる方」、また「新たに読者になることを希望される方」を便宜的に「会員」とお呼びすることにいたします。

・「会員」には、これまでと変わりなく「センターつうしん」などはお届けいたします。

・規定第3条により、具体的事業計画の策定は運営委員会の仕事になります。そのため、これまでの会員による「総会」は規定からは消えていますが、開かれたセンターでありつづけるために、「会員のつどい」は毎年度もっていこうと考えています。

本の紹介

「子ども理解と自己理解」

田中　孝彦　著

著者は、著書の「はじめに」に「子ども理解はおとなの思想の根本課題」のタイトルをつけ次のように結んでいる。

日本の教師たちの教育実践の歴史には、（中略）子ども理解の思想・実践の貴重な蓄積があります。ところが、最近の日本の教育研究の世界では、それらの実践と研究の蓄積に敬意と関心を払わないままに、「新しい」装いの議論をしようとする傾向が強まっているように感じています。私は、そうした蓄積を想い起こしながら、人びとが子どもについての理解を深めあう過程を支えていけるような、子ども研究を軸とした教育学の構築の道を、頑固に追求していきたいと考えています。

この「はじめに」のタイトルと結びで、著者の意図、著書の内容が推測できるのではないか。少なくとも現場の教師は、「子ども理解」という、言えば当たり前のことを取りあげて「頑固に追求したい」という著者の考えに謙虚に耳を傾けてみることが大事ではなかろうか。

発行所　かもがわ出版
定　価　本体1800円＋税
問合せ　みやぎ教育文化研究センター

センターの動き

〈1月〉

5日　57回冬の学習会に参加。新学期が始まっているところもあるという。

8日　9時半、東北大に戸倉の麻生川さんに来ていただき戸倉の座談会について話合い。人選、日時も決める。

12日　三輪さんから「3・11あの日のこと、～」が3刷りに入ると連洛。

13日　10時半から東北大との打ち合わせ会。文科省から佐藤さん参加。事務局会議。別刷りの実践報告書を付録的につけることを提案。

14日　雑誌「教育」をよむ会。

16日　カント読書会。ヤスパースのつづき。会の名称「ゼミナールSIRUBE」に決まる。6時から大田堯さんの会の締めの実行委員会。

17日　11日の石巻高校生の集まりの場所、菊池英行さんに相談、平和会館に決まる。

19日　小森陽一さんの公開授業の件で清岡さんと小牛田農林高校に行く。

20日　長町南岡野定さんの授業をみる。すぐ、6年2組あてに感想をファクスで送る。

21日　1時半から中野典子さんの仕事を話してもらう能力発達の会に参加。

23日　田中孝彦さんの新著「子ども理解と自己理解」がかもがわから送られてくる。

24日　午後、戸倉小の集まりについての打ち合せで高橋満さん来室。

25日　出浦さん来室。センター通信などのCD化について話し合う。

26日　岡野定さんの授業を見に行く、2回目。また感想を送る。

27日　「3・11あの日」3刷になったのだが、どんな人に読まれているのか。事務局会議。

30日　HPのためのOB会。

〈2月〉

3日　午後、岡野定さんの卒業授業。ヒロシマの歌。

4日　戦後教育実践書を読む会の第4回。斎藤喜博の「未来誕生」。案内人は皆川秀雄さん。

5日　戸倉小のこれまでに深く関わった方の座談会。6時に終える。

6日　善王寺に寄り戸倉中の菊田さんの話を聞く。

8日　田中孝彦さんから前衛3月号が送られてくる。センターつうしんを縦糸にし地域と学校の「復興」を考えている。

9日　事務局会議。教育白書委員会をつくることを決定。

10日　小牛田農林での小森さんの授業。1年2クラス、2年1クラス「吾輩は猫である」を使って3時間、授業。その後、文芸部に羅生門の授業。5時半過ぎまで。

11日　7時37分の石巻行き高速バスで清岡さんと高校生の話を聞くために出かける。

15日　3月3日の会員のつどいの案内ハガキを会員に発送。

17日　10時から東北大での打ち合せ。文科省への報告書についての段取りと役割分担を決める。

20日　高校生座談会の原稿が熊谷さんから届く。

22日　高校生の原稿整理、なかなかうまくすすまず。

24日　事務局会議。

25日　雑誌「教育」をよむ会。

27日　清岡さん、東北大で一日、文科省助成提言書作成の仕事に。

28日　提言書の印刷についてきた出版と高橋満さんと4人で話し合う。通信別冊の原稿を渡す。

〈3月〉

3日　11年度「会員のつどい」、1時半から5時過ぎまで。堀尾輝久さんにきてもらう。話し合いは休むことなくつづき5時をまわる。

6日　通信別冊の校正。提言書校正の話し合いに高橋満さん来室。

7日　香川大学の高橋尚志さん来室。

8日　北田耕也さんから「長詩遙かな『戦後教育』」が送られてくる。提言書校正。

9日　提言書、すべて終わる。事務局会。会員のつどいについての話し合い。

12日　清岡さん、文科省に企画書の変更届を発送。

14日　教育会館の理事会と評議委員会。提言書「南三陸・戸倉小学校3・11決死の避難から善王寺（登米市）までの道を語る」刷り上がる。

15日　提言書を会員に発送。

（春日）

発行：(財)宮城県教育会館 みやぎ教育文化研究センター　2012・3・24　発行責任者：春日辰夫
〒981-0933 仙台市青葉区柏木1-2-45　フォレスト仙台5F
http://www.mkbkc.com　TEL 022-301-2403　FAX 022-290-4026